

《論 文》

“いのち”のプロジェクト ～「救命教育」研修会の概要及びその成果～

稲垣 裕美, 小粥 智浩, 小峯 力

A project of “life”:

The outline and the effects of lifesaving education workshop

Yuumi INAGAKI, Tomohiro OGAI, Tsutomu KOMINE

キーワード：ライフセービング教育, 心肺蘇生法, AED

Key Words: Lifesaving education, Cardiopulmonary resuscitation, Automated external defibrillator

1. はじめに

我々は、事故を防止し怪我を予防することの重要性から、Lifesaving教育の体系化を検討してきた¹⁾。その中でもっとも重視されるべきことは、“いのち”の教育で、バイスタンダー（救急現場に居合わせた人）には誰しもがなり得る可能性があるからこそ、“いのち”を救い守るための教育実践を通じて、事故を未然に防ぐことが、真の安全に寄与するのであるとした^{2) 3)}。消防白書（2009年度）の報告によると、2008年における救急隊の現場到着時間は平均7.7分となり、10年前の1998年は平均6.0分で1.7分長くなった⁴⁾。この数字からも、更なるバイスタンダーの存在が重要視されることになろう。心肺停止など生命の危機的状況に陥った人を救命し、社会復帰へ導くためには、1) 心肺停止の予防, 2) 早期認識と通報, 3) 一次救命処置, 4) 二次救命処置と心拍再開後の集中治療か

らなる「救命の連鎖」⁵⁾が必要で、これらの処置の1)－3)は、バイスタンダーに可能な処置であり、救急隊が到着するまでの7.7分の間に行われることが望ましい。その実践は救急教育を受講されたか否かにあり、この教育を日常化して広く普及できてこそ、“いのち”の教育の成果と言える。

そこで、本研究は、安全な社会環境づくりのため、龍・流連携事業の一環として、龍ヶ崎市内の教職員対象に救急救命を通じた理論と実践における教育研修の概要を報告し、その成果を検討することを目的とした。

2. 実施概要

2-1. 対象

研修会の対象は、龍ヶ崎市内の小・中学校及び保育園・保育所の教職員で、83名（男性46名、女性37名）の参加があり、それぞれの所属は、

小学校46名，中学校35名，その他2名であった。

2-2. 日程及び場所

研修会は，2010年8月3日（水）13：00から17：00まで，流通経済大学・龍ヶ崎キャンパスで実施された。また，基調講演と救命実技の2部構成のプログラムで，基調講演は大教室で，救命実技はスポーツ健康センターの救命トレーニング室で行った。

2-3. 研修会の目的

研修会は，数年前，市内の子どもが亡くなったという事故を受け，学校現場における事故の備え，事故防止の徹底を計るべく教育委員会が主催となり，龍・流通経済大学（2004年に龍ヶ崎市と流通経済大学が相互の知的・人的・物的資源の交流・連携を図り，まちの活性化と大学教育の向上に寄与するために結んだ協定）の一環で行われ，今年で3回目となった。現在，龍ヶ崎市内の保育園，小・中学校には，すべてAED（Automated External Defibrillator：自動体外式除細動器，以下AEDとする）が設置された。

このようにAEDという安全が配備された環境があるからこそ，児童，生徒たちを教える立場にある教職員は，救命手当ができることは不可欠である。

2-4. 指導スタッフ

指導スタッフは，流通経済大学スポーツ健康科学部教員3名が講師，指導補助として流通経済大学ライフセービング部（クラブ）の学生が携わった。

2-5. 使用器材

研修会での主な使用器材は，以下の通りであった。AEDトレーナー（レールダルメディカルジャパン株式会社，AEDトレーナー）30個，心肺蘇生訓練用成人人形（レールダルメディカルジャパン株式会社，レサシアンスキルレポータモデル）20体，心肺蘇生訓練用小児人形（レールダルメディカルジャパン株式会社，レサシジュニア）10体，マネキンフェイスシールド（レールダルメディカルジャパン株式会社，フェイスシールド）83枚，除菌脱脂綿（レールダルメディカルジャパン株式会社，マネキンワイプ）83枚。

2-6. プログラム内容

基調講演は，「我が国に求められる救急救命と生命倫理」のテーマで80分，救命実技では，心肺蘇生法とAEDの使用方法を130分取り扱った。主なプログラム内容は表1の通りであった。

表1 主なプログラム内容

内容	時間	概要
基調講演	80分	我が国に求められる救急救命と生命倫理
救命実技	130分	<ul style="list-style-type: none"> ・胸骨圧迫（小児と成人） ・人工呼吸（小児と成人） ・一連の心肺蘇生法（小児と成人） ・AEDの使い方（小児と成人） ・総合シミュレーション



写真1 基調講演



写真2 一次救命のデモンストレーション



写真3 AEDの実習



写真4 心肺蘇生法の実習



写真5 救命実習終了後の集合写真

3. 研修会の成果

3-1. 参加者の評価結果と考察

参加者を対象に研修会終了後、アンケート調査を実施した。アンケート用紙は、研修会が終了した後に配布され、その場で回答させて回収した。アンケート結果は81名から回収した（回収率97.6%）。

表2は、参加者による「心肺蘇生法（実技）」についての評価結果で、非常に役立つと答えた者は97.5%で、少し役立つと答えた者は2.5%であった。表3は、参加者による「AED（実技）」についての評価結果で、非常に役立つと答えた者は97.5%で、少し役立つと答えた者は2.5%であった。表4は、参加者による「総合シミュレーション（実技）」についての評価結果で、非常に役立つと答えた者は97.5%で、少し役立つと答えた者は2.5%であった。表5は、参加者による実技研修会の総合評価についてで、非常に役立つと答えた者は97.5%で、少し役立つと答えた者は2.5%であった。実技における研修内容は、基本的な救命実技として、心肺蘇生法とAEDを取り扱い、応用実技として、総合シミュレーションを取り上げたが、参加者のほとんどが非常に役立ったと評価していた。また、表6は、本研修会の内容を実際に使わなくてはならない場面に遭遇した場合、あなたはできますか？についての回答結果で、自信を持ってできると答えた者が30.9%、少しできると答えた者が69.1%であった。講習会では、いざ事故があった際には教職員によって救命手当ができることを目的としていたので、できるかできないかという視点でみた場合は全員ができることになるが、自信を持ってできるかどうかという視点では、自信を持っていない者が多数いた。このこ

とから、自信や勇気といった、救命現場で一歩前へ出ることの動機づけや訓練も行うべき内容であることが明らかとなった。表7は、参加者が「今まで、授業、部活動中、または、日常生活において、救命やAEDなどの現場に遭遇したことはありますか？」についてで、あった者は2.5%、なかった者は97.5%で、一次救命の現場に遭遇した経験はほとんどなかった。また、遭遇したことがあると答えた者は、家庭内で発生していたと答えていた。

表2 参加者による「心肺蘇生法について（実技）」の評価

評価項目	(人)	(%)
非常に役立つ	79	97.5%
少し役立つ	2	2.5%
役立たない	0	0.0%
全く役立たない	0	0.0%

表3 参加者による「AEDについて（実技）」の評価

評価項目	(人)	(%)
非常に役立つ	79	97.5%
少し役立つ	2	2.5%
役立たない	0	0.0%
全く役立たない	0	0.0%

表4 参加者による「総合シミュレーションについて（実技）」の評価

評価項目	(人)	(%)
非常に役立つ	79	97.5%
少し役立つ	2	2.5%
役立たない	0	0.0%
全く役立たない	0	0.0%

表5 参加者による実技研修会の総合評価

評価項目	(人)	(%)
非常に役立つ	79	97.5%
少し役立つ	2	2.5%
役立たない	0	0.0%
全く役立たない	0	0.0%

表6 「本研修会の内容を実際に使わなくてはならない場合に遭遇した場合、あなたはできますか？」の回答

評価項目	(人)	(%)
非常に役立つ	79	97.5%
少し役立つ	2	2.5%
役立たない	0	0.0%
全く役立たない	0	0.0%

表7 「今まで、授業、部活動中、または、日常生活において、救命やAEDなどの現場に遭遇したことはありますか？」の回答

項目	(人)	(%)
ない	79	97.5%
ある	2	2.5%

3-2 参加者の感想

参加者の主な感想は以下の通りであった。この研修会を通じて、児童・生徒を守りたいというモチベーションの高まりが読み取れる者が多くいた。

- ・基調講演にて、実際に命の危険な場面を拝見し、本当に現場で起きた時のことを考え、しっかりと身につけていきたい。
- ・基調講演が心に響き感動した。その後の技術研修会も大変勉強になり、貴学には様々な場面で協力頂き感謝している。
- ・研修内容がとてもよかった。実技では、総合的・場面ごとの実技に発展し、身につけやすい流れであった。更に、繰り返しの実技が実践できたので、以前何度かやったが今回が最も良かった。
- ・スモールステップで実技講習をして頂いたので、やり方が概ね理解できた。また、実技場面を想定しての最後の実践講習は大変参考になった。AED等を使う場面に出会うことがないということがより望ましいが、万一に備え

て、慌てず実践できるようにしたい。

- ・実践的な練習や演習ができた。学校は広いので1人で行動し命を救う場面に出会うかも知れないので、携帯電話は必ず持ち歩こうと思った。
- ・素晴らしい設備と細やかなサポートの中、充実した研修をさせて頂いた。
- ・教員が求められる技術だということで懸命に行う必要性が理解できた。たくさんの生徒に囲まれている中で、緊急を要する場面や機会がたくさんあると思う。救命の可能性が高まることが理解でき、実践していこうと思う。
- ・成人だけでなく、子どもに対する実習があって大変役立った。実践において大学生のアドバイスにも助けられた。
- ・実際の場面をシミュレーションして行っただが大変良かった。1年に1回のトレーニングでは少なすぎるので、1ヶ月に1回くらいは、今後もシミュレーション（実技）をしたいと思う。
- ・心臓マッサージの回数が以前と変わっているなど、新しい方法を知ったことがとてもよかった。実際に遭遇したときに、自分から行動できるようにしたいと思う。もちろん、無いことが一番良いのですが…。
- ・慌てず手順良く、またリズムよく実践することは難しいと思った。また、圧迫の感覚、息を吹き込む感覚、それを保つ技術は難しく、時々の練習の必要であることを痛感した。子どもたちの命を守るのは教師自身だと強く再確認した研修会であった。

4. おわりに

救急救命を通じた理論と実践における教育研修の概要を報告し、参加者から得たアンケート調査からその成果を検討した結果、概ね参加者はこの教育研修会の内容を高く評価していた。実際、教職員は、児童・生徒の生命を預かる役割を有している。いつどこで事故に遭遇するか予測することは困難ではあるが、教職員たちは実践を通じて、事故防止思想を深め、常に児童・生徒たちの安全確保に努める予見能力を高めなければならない。本研修会は、そのための知識や技術を習得するだけでなく、事故を未然に防ぎ起こることを備えの研修としての位置づけを是とするモチベーションの維持・向上も期待はできた。今後も、「生命（いのち）」を学ぶ機会を通じて、救命教育を社会に普及していく

ことは重要であり、そのためにも、客観的な指標を基に詳細な検討をする必要があろう。

参考文献

- 1) 小峯力, 小粥智浩, 稲垣裕美: 体育・スポーツ系大学におけるLifesaving教育の体系化～救命・トレーナーの視点からBLSへの試み～, 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 1: 45-53, 2008
- 2) 小粥智浩, 稲垣裕美, 小峯力: “いのち”のプロジェクト～RKU WEEKでの試み～, 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 2: 39-46, 2009
- 3) 小峯力, 小粥智浩, 稲垣裕美: “いのち”のプロジェクト～CPR教育の試み～, 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 3: 91-96, 2010
- 4) 平成21年版 消防白書, 第2章 消防防災の組織と活動: <http://www.fdma.go.jp/html/hakusho/h21/h21/index.html> (2010-11-30参照)
- 5) ガイドライン作成合同委員会 (日本蘇生協議会, 日本救急医療財団), 救急蘇生のためのガイドラインのドラフト版, 第1章 一次救命処置 (BLS): http://jrc.umin.ac.jp/pdf/20101019/guideline1_BLS.pdf (2010-11-30参照)